

ま え が き

グローバルコミュニケーション教育センター(CEGLOC)日本語論集34号が刊行されました。寄稿、研究ノート1件、報告3件、そしてCEGLOC日本語教育部門のFD活動記録が収録されています。

現在、筑波大学には、約120の国・地域から、約2500人の外国人留学生在籍しています。平成29年のJASSOのデータによると、筑波大学は、国立大学では2番目、全国の私立大学を合わせた中でも6番目に多い人数となっています。

今年度は、CEGLOC日本語部門に関係する日本語授業としては、就職サポートに力を入れ「キャリア支援日本語」として新たにBJT(ビジネス日本語能力テスト)のクラスが開講されました。また、英語だけで学位取得可能な英語プログラムに関しては、地球規模課題学位プログラムが国際基督教大学に半年間行って単位を取得するというコースであるため、日本語クラスの学習の連続性と受講するレベル設定に他のプログラムとの関係で難しい面もあるそうです。さらに今後、新たな学位プログラムがいくつか計画されているようで、日本語のコース全体の見直しが求められる時期にきていると考えます。また、単位科目にはなりませんでしたが、マレーシア工科大学のサマーコースの2年目が開講され、綿密に計画された日本語プログラムに対する学生の評価は大変高いものだったと伺いました。

留学生の存在がますます重要なものになっていくとの学長の方針を伺うにつけても、研究、生活の基盤となりさらに就職にもつながる日本語教育をさらに充実させる必要性を感じています。

日本語教育振興協会主催の2017年度「日本留学 AWARDS」の「国公立大学部門」と「大学院部門」において筑波大学がW入賞し、式典に出席してまいりました。この賞は日本語学校の教職員が選ぶ留學生に進めたい進学先ということで投票の結果選ばれた栄えある賞ですが、その中で授賞理由に日本語教育の充実をあげていただきました。

CEGLOC日本語教育部門の専任教員は、昨年度末に退職と他大学への転出で2名減となり、その後さらに1名が他大学へ転出したため10名から7名体制となりました。この人数は10年前の留學生数が現在の半数弱である1200人の時よりも減少しております。今後、留學生数の増加、多様化に 대응するためにも、またこれまで高い評価を得てきた筑波大学日本語教育の経験を活かし発展するためにも、これまで以上の全学的な支援をお願いしたいと思います。

本論集をはじめとする日本語教育に関する日頃の研究成果が、広く学内外の日本語教育関係者の貴重な資料となることを期待しております。

2019年3月

筑波大学
グローバルコミュニケーション教育センター
日本語教育部門長 酒井 たか子